



日本マンドリン連盟本部会報

(JAPAN MANDOLIN UNION)

1991年
2月1日

No. 109

〒168 東京都杉並区高井戸東3-4-11

日本マンドリン連盟本部事務局

電話 東京 (03) 3334-6962
振替 東京 1-211
銀行 第一勧業銀行浜田山支店
普通口座 1031764

第22回定時会員総会開催通知

会 員 各 位

会長 伊 東 尚 生

第22回定時会員総会を下記のとおり開催しますので、会員各位のご出席をお願いいたします。
恒例により理事会兼常任理事会と同時に総会を行います。

出席者は郵便葉書で出席の旨を、欠席者は下記様式の委任状を本部事務局宛にお送りください。

- ◎ 日 時 1991年3月2日(土) 午後1時30分より
- ◎ 会 場 飯田橋会館 〒102 東京都千代田区富士見 2-10-36 (Tel. 03-3263-7711)
(JR総武線の飯田橋駅の西口(市ヶ谷方向)の改札をいられ、左の交差点を右に曲がった左側、徒歩1分。地下鉄の有楽町線・東西線とも飯田橋駅下車)
- ◎ 主な議題 1. 1990年度事業報告・決算報告
2. 1991年度事業計画案
3. 1991年度予算案
4. その他

議案書は出席通知のあった方に送付または当日交付いたします。

なお、総会終了後に同会場で次の行事を予定しております。

- 1. 中野二郎先生を囲むマンドリン座談会(武井音楽文庫資料の1部を展示)=午後3時30分より
- 2. 懇談会=午後5時30分より(会費7,000円)

委 任 状

第22回定時会員総会に欠席しますので、議事決定権その他一切の権限を「」に委任します。

1991年2月 日

住 所 〒

会 員 名

Tel.



武井文庫を巡って

中野二郎

J.M.U.前会報108号にサミュエル・アデルスタインの「マンドリン^{回想録}」が復刻されたことが報ぜられ、私は市毛氏の英断に少なからず愕き、このことが徒労に終るのではないかという杞憂が拭い切れなかったが、その後間もなく更に再版されたことを聞いて私は喜ぶ前に啞然としたのである。というのは、マンドリンギター研究、アルモニア誌終刊後久しくマンドリン音楽の内容に関する論説（報道以外）の文字に接しないので、マンドリン愛好者の大半は、そうしたことに無関心と決め込んでいたからである。若し関心が強ければ、本会報はもとより、各支部で随時発刊されているものもあるので、何らかの形でそうした現われがなければならぬ筈なのである。

私はこの回想録の頒布状況に少々意を強くして、武井文庫に啓発された様々な想いを、秩序なしにあれこれと並べて、或いは読者にとって退屈なものになるかもしれないが、斯うした事実があったことを記しておきたいのである。

× × ×

フィレンツェのマルゲリータ皇后マンドリン合奏団

前記回想録に掲載された上記合奏団の偉容は始めてみるもので、今更乍ら万感胸に迫るのであるが（決して誇張ではない）、実はこの小冊子を私は故武井氏から直接拝借していたのであった。念のため武井氏と交信した書簡を取り出して調べてみた。氏の亡くなられた年、昭和24年1月から10月までのものが31通あり、7月12日付のものに「……拝借のロシア楽譜のカタログとアデルスタインの小冊子御送りいたします。何卒ゆっくり御使用ください。且下全然使用いたしておりませんから……」としてある。

静かに思い起こすと確にお借りして、C. Graziani - Walter と G. Branzoli の初めてみる姿に随喜してこれだけを手早く写し撮り、（当時コピー機は無かった）早々に返却したのであった。主としてギターの古版譜の貸借を繰返したのであったが、何しろ荷作り紐の掛け方にも気を使われる程の方なので、ゆっくり使ってくれとあっても、内容は既に「マンドリンギター片影」の訳文で承知していたので迂闊にもこの合奏団の偉容を見落として返却して了ったのは何としても慚愧に堪えないが、その時点で斯楽への知識が浅かったのが悔やまれる。

昭和48年のプリランテNo.48号にも“肖像写真について”でこのことに触れており、同年同志社大学マンドリンクラブ第73回定演のプログラムにも前記 Branzoli と Graziani - Walter の肖像を入れている。この作者の肖像はポーン^{ポーン}の著作にもなく殆んど唯一のものである。

余事乍ら定期演奏会のプログラムに作者の肖像を組入れることを始めたのは、私が赴くようになってからで（昭和39年以降）、一時これを模倣することが流行した時期があったが、何処もあとが続かず同志社大学以外は凡て沙汰やみとなったのは、そうしたことを心懸ける人が居なかったということである。

この合奏団の創設されたのは1880年（一説に1881年）で当時イタリア・プレクトラム楽界の権

「武井文庫」の記憶を辿って

足立直子

大正12年の震災の後、本郷の高台に家を見て直し、その敷地内に「正蓉楽堂」という合奏場が出来たのは、大正15年でした。その命名は、同じ年に亡くなった祖父であったと聞いています。私は昭和になって、その家で生まれました。

震災以前に父が集めた楽譜は、膨大なものであったそうですが、それはすべて震災で焼失しました。再び集めた楽譜は、新しい家の二階の「書斎」にありました。この部屋は広い西南に面する角部屋で、父の皮張りの大きいデスクの上には、いつもウェストミンスターの箱がありました。

北側の壁面は大きな特注の戸棚で、天井から下まで楽譜入れとなっており、重いビロードのカーテンが垂れていました。棚は楽譜専用で、スライドする棚が上から下までぎっしりとありました。

週一回の「練習日」になりますと、父はズボンの上にふかふかしたガウンのようなものを羽織り、タクト片手にその棚の前に立って楽譜をめくっていました。そこにはさまざまな野の大小の五線紙も、沢山入っていました。

その部屋の窓からは上野の松坂屋が前方に見え、たくさんのアドバルーンが上がっているのも見えました。一隅には、斜めにゆったりとセミグランドピアノが置かれており、時々母が弾き、私達も練習しました。この家には合奏場にアップライト、下の応接間に同じく、3台のピアノがありました。

「正蓉楽堂」は、独立した建物でしたが、家の中から楽器庫を通って行くこともできました。メンバーの方々は、門から左手の石畳をふんで楽堂の玄関に直接入られるのでした。

この家を引き払うことになったのは、やはり父の無計画な生活……音楽を含めて……と当時の銀行の倒産その他もろもろのことが重なったことであつたかと思われれます。私は幼くて事情は判別出来ませんでした。引っ越し先は中野区、中野駅からバスで15分ほどの柴町通りという処でした。この家は本郷の邸に比べればまことにささやかなものでしたが、それでもまだ女中さんも3~4名はおおり、書生もおりました。門の前に畑や枯れ木立のある風景が珍しく、子供には楽しかったという記憶があります。父も母も、よく思い切ったものと、今になればその心がしみじみ思われれます。

楽譜は、玄関わきの応接間の、窓の下に置かれていました。勿論専用の棚などはありませんでした。

昭和18年頃、戦争が激しくなってからは、この家の広い納戸の下にあった地下室に、父が自分で運び入れました。この地下室の蓋は鉄の重い大きな引戸でした。この中に、ラコートのギターも、私のギターも入れ、勿論箏や布団も入れてありました。庭から縁の下を見ると、空気抜きの窓が見えました。父はスコップで一生懸命に土を運び、その窓を自分で埋めたのです。父はもともと細身でしたが、当時の食料事情もあり、宮内省での仕事も苦勞が多かったようで、益々細くなった身体をようように動かして懸命に作業をしておりました。

その家が火に包まれたのは、昭和20年5月25日の東京大空襲でした。庭先の防空壕に祖母や母、乳飲み子を抱えていた姉を避難させ、父は私と一緒に壕の外に立っていました。その夜はいつもと違う編隊の向きで、見上げる暗い空一杯に、ごうごうと沢山のB29が向かってきました。それがパッと赤くなると同時に、ザーッと音がしてその赤い点々が下をむき、そのまま私達の上に降ってきたのです。父は直ぐに「今日は駄目だ」と言い、ザンという音と同時に火を噴き出した中を祖母や姉や母を避難させました。まだ家は燃え上がってはならず、竹竿に結んだ火叩きで廊下や塀についた火を叩いたりしておりましたが、父は「もう駄目だ、逃げよう」と、母達のあとを追って火の

中を走りました。

父は案外そういう場合の指示は的確で、普通の火事などでも風向きを読むのがうまかったような気がします。ともあれ、まだ中野は郊外でしたから、しばらく行ったところに田圃がありました。そこで一家が出会い、翌朝、焼跡の家に戻って来たのでした。

家はまったく焼けていましたが、庭先においた食器の棚などは無事で、当座は祖母と姉を近所のお宅にあずけ、しばらく濠暮らしてました。父はたしかそこから宮内省に歩いて行ったのではないのでしょうか。

もと運転手だった人が来てくれた翌々日でしたか、父は地下室をあけたがりました。地下室の鉄扉の隙間から、白い煙が上がっているのが気になっていたのです。焼けてしまったのか、イヤもしかして……開けると同時にさっと火が上がるのではないかと、でもそのまま蒸し焼きになってしまうのも残念である……と、随分迷ったようでしたが、やはり開けようということになりました。井戸から水を汲んでは、家の灰が埋高いあたりにかけると、ものすごい水蒸気が上がります。また水を汲んで……を繰り返しました。ある程度かけたところで、今度は残っていたスコップでその灰をどけるのですが、これがまた大変な作業で、ゲートルを巻いた父は、本当にフラフラになりながらやったのでした。そして……やっとなら鉄扉をこじあける……姉も私も母も、ともかく総動員で隣近所から借り集めたバケツに水を汲んで待ち構え、開けると同時に一斉に水を掛けるという大騒ぎでした。白い煙はたしかに上がってはいましたが、階段を降りると、どうやらそれは一番上にあった布団がくすぶっていたようでした。まだ煙りがあるからと止めるのもきかず、父は中に降りて行って暫く……這い上がってきた父の手に数枚の楽譜が……「アッタ・アッタ・」その父の狂喜したあの顔……細い顔が、益々細くなったのが、灰と煙で汚れて……その顔をいっぱいにはこぼせて、父はただただ大喜びでした。姉も私も、その父の笑顔が今でもありありと思い浮かべられるのでございます。

現在、譜面が茶色になっておりますのは、その時の「くすぶり」が原因だと思われます。木製の八角形のようなケースに入っていた私のギターは、中も外もバラバラにこわれてしまいましたが、皮製のケースのラコートは、全く無事であったのは驚くべきことでした。

OSTのメンバーであられた杉田村雄氏のお住まいの近くに、荷物を疎開してありました。その農家を頼って、一家は移動しました。京王線の聖跡桜ヶ丘駅から10分ほどの処に杉田氏のお宅があり、そこから更に10分ほど歩いた奥の方の農家でした。栗林の丘を背にしたその集落では、食料事情も悪かったのですが、栗を御飯代わりにするような不思議な村でもありました。ここにおります間に生まれた曲に「蚕」というのがあります。その頃、王精衛の亡命騒ぎがあり、父が夜中に宮内省に駆けつける騒ぎがあったりもしました。

ここで敗戦を迎えました。焼け残りの宮内省の、父の部屋に行ったことがあります。たしか発疹チブスか何かの予防接種をしていただきに行ったのだと思います。宮内省の正面玄関には大きな大理石の階段があり、それを登り切ったところに父の部屋がありました。部屋には赤いじゅうたんが敷かれており、洗面所は白いタイルで、ひろびろとしたデスクの前の父は、ひとまわり大きく見えました。すべて、南多摩からきた私の目には、たいそうな御殿のように思われたのでした。

この疎開先には、楽譜を運ぶことは出来なかったと思います。宮内省か、OSTの兼藤氏のお宅か、台東区の、当時の練習場になっていた教会にはこびこんだのではなかったかと思えます。父はしばらく楽譜と離れて暮らしたのでした。(次号につづく)